

きじむんのどーちゅいむにー

あなたの知らない琉球大学の秘密編

第3回 琉球大学の美術品紹介



ハイタイ&ハイサ〜イ キジムンヤイピン！今月は、琉球大学のいろんな場所にひっそりとたたずむお宝(美術品)について紹介しますよ〜。

普段は建物や壁の一部と化したかのような美術品ですが、ニシムイ美術村で活動し、戦後の芸術復興に影響を与えた作家の作品も幾つかあります。そんな物語を、ほんの少しだけお話ししますね。では、Here we go!!



最初に紹介するのは玉那覇正吉「ホワイトビーチ」(1973)です。玉那覇は、最近では「ニシムイ」の美術家の一人としても知られています。戦後東恩納の収容所で生活していた画家たちが、米軍の許可を経て那覇市首里儀保町西森(虎頭山の北)にアートコロニーを作りました。それがニシムイ美術村です。

後に玉那覇は琉球大学で教鞭をとり(1955-1984)、美術教育にも力を尽くしました。

次は安谷屋正義「塔の群れ」(1963)です。塔シリーズは安谷屋の画業を代表するものでした。安谷屋は46歳のとき(1967)釣りに出かけ、脳内出血によって急逝しました(琉球大学の在職期間：1953-1967)。この作品は、白の背景に水平方向の緑の草原と抽象化した塔が垂直に配置され、緊迫感のある力強い作品となっています。



3つめは山元恵一「季節風」(1971)です。山元は東京美術学校在学中に超現実主義(シュールレアリスム)の影響を受けたといわれています。作風は、静物画でありながら幻想的な雰囲気をも漂わせたものです。琉球大学では1952年から1977年まで教鞭をとりました。



みなさん、これらの作品は、琉球大学附属図書館の沖縄開架資料室にある画集でみることができます。

みにきてね〜!

最後は安次嶺金正「バナナ」(1954)です。抽象的表現への移行期の作品。平面的構成ですが、緑色のヴァリエーションが奥行きを与えています。1954年から1982年まで教鞭をとりました。

